

昭和59年度定例会発表要旨

昭和59年

■ 5月23日

研究発表

近世における自治都市の発達

阿部善雄
(史学科教授)

江戸時代における都市や村の自治機能の発達についての史料は、全国的にみて極めて少なく、また断片的であるため、その研究がすこぶ遅れている。もう少し突込んでいえば、町益金や村益金に関する史料が残っている場合でも、これを自治活動の財源であるとする視角を組み立てていないので、一向に研究が進まないできたといえるのである。

この意味で、奥羽街道筋の白河領須賀川町（現、福島県須賀川市）の町益金を財源とした自治活動は、近代の自治都市の母型として、また銀行前史的金融市場の展開の面からみても、重要な問題を提示するものである。須賀川町においては、自治活動の拠点としての町会所が成立するのは享保期であり、基金の利殖によって財源の確保を企図するようになったのも、同じころであった。これらのこと自体、全国の先駆をなすものであるが、この町が特に社会事業思想を基底として町民生活の安定と福祉の拡大を目標とする運動をひろげたということも、自治活動を充実させることになっている。東北地方に間引きの風潮が惨状をきわめた時期において、富商内藤盛昌とその子孫は寛延から寛政に至るまでの期間、資産を投じて多数の出生児に成育費を恵投し、また富商の市原綱禰も、町益金を設定して利殖し、その利子によって貧窮の町民の生活を守ったり、多くの長屋の修復を実施したりしている。

こうして須賀川町においては、同町を構成する四か町それぞれに町益金が設定されるとともに、四か町を一体とした町益金も設けられ、その利子が町民に対して、各種の生業資金・生活資金として貸付けられ、さらには近郷の者たちの需要にも応じた。とりわけ興味深いのは、貧乏人たちに結納金まで融通してやっていることであ

る。その他、火用備金（消防関係町益金）や、駄馬の飼育のための馬立金など、目的を限定した町益金なども備えるようになり、見事な町政の運営を図っているが、さらに天保饑饉などにおいては、いずれの町村にもみられない措置が講じられている。ひとたび饑饉におそわれると、町会所は富商たちにその備蓄米を供出させ、それを貧しい町民に安値で売渡すとともに、供出者たちに対しては、饑饉時の相場との差額を町益金から支払ったのである。

町益金の設定の仕方には、ほぼ三通りがある。一つは町自身が芝居などを興行して、その利益を基金とする、二つめは富商が一部の基金を提供すると、これを早速利殖して一定額にまで基金を拡大して町益金とする、三つめはいわゆる掛溜講によって基金を設定する方法である。掛溜講とは、毎回の当りクジをできるだけ少なくするかわりに、途中において貧乏な参加者に融資するとともに、富裕な者たちにも預託することによって、講の終回時にはかなりの金額が残るため、これを町益金とする方法である。いかにも須賀川町は、銀行的金融の発展のなかにあつて、その機能を町政の拡充と社会事業の拡大に適用したといえるであろう。

■ 6月27日

研究発表

チンギス・カーンの陵墓は実在するか

萩原淳平
(史学科教授)

要旨

モンゴルに関心を持つ研究者は、英雄チンギス・カーンの死因、死去の日時及びその場所、埋葬地・陵墓などチンギス・カーンの死去にともなう諸問題に一度は研究を進める。これまでも洋の東西を問わず碩学と言われた人々が多くの研究を発表してきたが、まだ定説はない。

それにもかかわらず最近中国でチンギス・カーンの陵墓がオールドス地域において発見され、多数の埋蔵品が博物館に収蔵され展示されていると伝えられる。

私はこれらの説を詳しく検討した結果、モンゴルの社会習慣上陵墓は存在する可能性が殆んどなく、更にオルドスに陵墓が作られた可能性は全くないと考える。それならば、当然遺物も偽物となる。一部の研究者が述べているように、遺物は15世紀末から16世紀初めにかけてチンギス・カーン崇拜思想の勃興によって作られたものであると言う可能性は否定できない。しかし遺物の一部にはチンギス・カーン自身の用いた遺品そのものもあり、それが中心になっている可能性が大である。その理由は、世祖クビライが13世紀に外モンゴリアにあったチンギス・カーンの后妃の住んでいたオールド（行帳）を河套すなわち現在のオルドス地方に移した形跡がある。それが地名の由来ともなり、厚く保護され、遺品が今日まで残っていた事を明らかにした。

■ 5月23日

研究発表

枕詞論の構想

近藤信義
(国文学科助教授)

「まくらことば」と一般的に呼び慣わされている和歌の特殊な言語がある。このことばを発生時まで追求めていくと、地名と結びつくあり方へたどりつく。そして、

たとえば「カムカゼノイセ（伊勢）」と言ったとき、この短い詞章の結びつきを、実は言外で支える神話伝承の存するところまで至りつく。ところがこうした始原的な状態を見出すことのできる〈枕詞〉はごくわずかである。しかし、個有の地名と結びつく形を始原のものと認めて以後の歌々を眺めていくと、枕詞はこれ自身が特殊な展開を遂げつつ、和歌を彩る修辭として安定した表現となってくる。これらの流れを、三つの段階を置いて考えると次のようになる。①始原的なあり方、一古語・諺など—②古語が地名起源等に捉え直されて再活用されるあり方。③うたの様式の中で、新たな創作が行われるあり方。(以上発表分)

この三階梯の中で、万葉集時代は③の展開が目ざましい。したがって〈枕詞〉は万葉時代にまさしく消長を見せた表現であったと言い得る。その活性を導いた方法は、第一に〈音〉の働きを最大限に生かしたところにある。次いで〈音〉から〈意味〉へ比重をかけていって、いわゆる〈喩〉の方法を導いたところにある。例えば「あさ露の消やすき命」と言えば、「露」が「消やすき命」の〈喩〉となっている。このように表現の一般性へと向かっていったのである。しかしこの方法は言語同志の結びつきを〈意味〉の中で解決する方向を持った故に、万葉の時代では形式化し固定化してしまった。

昭和59年度特別公開講演会要旨

昭和59年

■10月24日

研究発表

「文学と革命と恋愛と哲学と」
——一冊の本の源流を尋ねて——

藤田美實
(人文科学研究所々長)

内容については、立正大学文学部論叢第80号に掲載しております。

■11月28日

研究発表

地下水探査技術の史的展望

山本莊毅
(地理学科教授)

地下水は地球上における「かけがえのない」水資源で

ある。その量が地球上における淡水資源の中で最も多いものであることは専門家間で常識となっている。普通目に見える河川や湖沼の水量は微々たるものである。というのは、地球陸地の $\frac{1}{2}$ 以上を占める乾燥沙漠の地下にも、常習乾魃地帯の地下にも大量の地下水が伏在しているからである。

地下水は人類発祥の太古から生活に不可欠の便利な水資源であった。人類はその昔、高燥の地に生活していた。雨が降らなければ涸れてしまう河川、大雨が降れば氾濫を起こす河川、流出が大きければ濁濁する河川そして悪疫瘴癘の住処である河川は人間にとって近より難い存在である。目に見えていながら使えない“水”であった。人類が頼りに出きる“水”は地下水だけだったのである。もし高燥の地に自然に湧出する地下水——“湧泉”いづみ——があったら！

人類は最初、自然に湧き出す地下水をそのまま利用し